

令和6年度 学校評価報告書【国立市国立第二中学校】

学校教育目標	たくましく現代に生き、平和で幸福な未来社会を創造する人間豊かな生徒の育成をめざす 一、よく考え進んで学習する生徒 一、自らの心と体をきたえる生徒	重点目標	『子供たちの模範となり、丁寧に鍛え、成長率NO.1をめざす』 ～鍛え・乗り越え・考え・成長する国立二中～ 共に学び、共に助け合い、共に生きる「共学」「共助」「共生」の国立二中
--------	--	------	---

学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評 価 指 標	達成状況		分 析	改 善 策	学校関係者評価
					中間評価	最終評価			
一 自 よ ら く の 考 え と 進 体 ん を き 学 た す る 生 徒	「 学 習 力 向 上 」 に 取 り 組 む 育 成	意欲を高める学習指導を通して、主体的に学ぶ生徒を育成する。 ・共に学ぶ「共学」	「基礎的な知識・技能」の習得 ・ねらい・流れ・まとめを明確にした授業改善 ・授業規律の柱としての学び、話し合いのルール「いりたまご」の確立 ・体力テストの活用 ・家庭学習の定着	・生徒授業評価「分かりやすさ」の肯定的評価85%以上 ・家庭学習の定着状況 ・1ページノートの活用を実施 ・夏休みのchromebookの持ち帰りによる家庭学習の啓発 ・体力テスト、都の平均値との比較	C	B	・2学期の生徒授業評価「13 先生の説明は分かりやすいですか」の肯定評価96%であった。「ねらい・流れ・まとめ」の明確化の成果と考えられる。 ・2学期の保護者学校評価「3 お子さまは、家庭での学習習慣が定着している」の肯定評価が55%、教員学校評価「15 計画的に家庭学習が行えるように手立てを工夫している」62%であった。 ・体力テストでは、8項目中「上体起こし」と「立ち幅跳び」の2項目が都の平均値より下回ったが、総合的には3年女子以外で都の平均値を上回った。全学年に渡り、継続的な長距離走授業の効果といえる。	・教員学校評価「13 授業中、生徒の理解状況について気を配っている」100%であった。今後も引き続き、生徒の実態を的確に踏まえ、丁寧な指導を行う。 ・1ページノートの活用やchromebookで夏休みの課題を実施する等、家庭学習の充実を図ったが、定着とまでは至っていない。教科に応じた具体的な家庭学習の行い方や、習熟度に応じた課題の提示などをしていく。	生徒授業評価の結果から、授業の進め方は概ね生徒に分かりやすいものと判断できる。家庭学習の定着に関しては、クロームブックの活用により、分からないことを復習できる等、学習方法の工夫を提示できるとよい。また、保護者にも家庭学習に関する意識付けも必要かと考える。
			「思考力・判断力・表現力」の育成 ・個→集団→個の学習スタイルの授業改善 ・学びを活用する力の育成 ・問題解決型学習の活用 ・chromebookの効果的な活用	・生徒授業評価「深く学ぶ楽しさ」に関する肯定的評価80%以上 ・教員学校評価「学びを活用できる授業実践」肯定的評価80%以上	B	A	・2学期の生徒授業評価「14 自分の考えを深めたりする時間や、自分自身で工夫して活動する時間がありましたか」の肯定評価95%であった。また「9 知ること・できること・分かることで授業が楽しい」生徒の割合が94%であった。教員学校評価「10 分かりやすく、考えさせる授業に努めている」100%であった。 ・「個→集団→個」の学習スタイルを活用し、授業改善に取り組んだ結果といえる。個人の学びを深める時間を確実に設定することが、深い学びに繋がったと考える。	・各教科の特性に応じて、問題解決型学習の設定や、効果的なchromebookの活用を取り入れた授業の展開をする。 ・校内研修を基に、各教科の特性等に応じた、学びのスタイルを模索する教科部会の充実を図る。	授業改善の成果が表れていると考えられる。さらに、各教科等において学びを深める授業づくりの実践を行い、生徒が進んで学習に取り組む環境を醸成することに期待する。
			「個に応じた学習支援」と「特別支援教育」の推進 ・特別支援学級（A組）と特別支援教室（かがやき）、通常学級との指導・支援の連携 ・放課後補習教室「二中STEP」の活用	・習熟度別少人数授業（数学・英語）の活用 ・二中STEPの充実と質問教室の実施 ・特別支援教育の視点における授業実践の充実 ・保護者学校評価「個に応じた取組」肯定的評価80%以上	B	A	・2学期の教員学校評価「22 個々の生徒を理解するように努めている。」の肯定評価100%であった。2学期の保護者学校評価「5 一人一人を大切にする学級経営」の肯定評価が82.9%であった。「交流及び共同学習」を推進する中で、在籍学級、特別支援教室、特別支援学級の担当教員が生徒の情報共有を密に行っている成果と考えられる。 ・「二中STEP」の参加者が多い日は、20名弱。2学期の延べ人数は110名であった。担任教員から利用を薦められた日は参加者が多かった。	・他学年に比べ1年生の「二中STEP」の利用者が少ないため、一層の周知を図る。 ・今後も、特別支援教育の視点における授業実践として、授業の内容やねらい、流れ等を表示し、生徒に視覚的に見通しをもたせる。 ・習熟度別少人数授業では、少人数を活かした授業展開や習熟度に応じた課題設定等、指導方法の工夫を図る。	A組の細やかな配慮と指導に感心させられる。「二中STEP」の活用を担当が薦めることは効果的である。「二中STEP」が、心のよりどころにもなり、学習できる放課後の居場所になることを期待する。そのために、様々な年齢層の指導員が配置されることが望ましい。
一 正 し く 判 断 し 実 行 す る 生 徒	「 生 活 力 向 上 」 を 生 徒 の 育 成	きめ細かな生活指導により生徒の規範意識を高め、自他を敬う生徒を育成する。 ・共に助け合う「共助」	「基本的生活習慣」の確立 ・「生活規律改善計画」の充実 ・情報モラル、リテラシー教育の充実 ・居心地の良い学校づくりの推進 ・生徒が主体となる活動の充実	・心地よい挨拶の励行 ・TPOに応じた言葉遣い、態度 ・時間と安全を意識した学校生活 ・SNS学校ルールの見直しと定着 ・保護者・生徒アンケート「学校が楽しい」肯定的評価80%以上	B	B	・保護者学校評価「4 基本的生活習慣」の肯定評価は86.5%、「12 規範意識」の肯定評価は87.63%、「18 情報モラルを意識して生活している」の肯定評価は88.4%、「19 安心・安全で雰囲気がよく、登校することを楽しむにしている」の肯定的評価は72.1%であった。 ・教員学校評価「11 授業規律を守らせ、集中して取り組ませる」の肯定評価は92.3%であった。 ・授業中に関する規範意識は概ね問題ないが、校外学習や宿泊行事等における生徒の規範意識は課題があった。	・生徒の校外におけるスマートフォンの使用に関するトラブルが度々見受けられた。情報モラル、リテラシー教育に関しては、問題が起きた時だけでなく道徳科をはじめ情報モラル教育や、生活指導に係る安全指導日等でインターネットやSNSの適切な利用について指導する。	SNSによる外側からは見えない、いじめの構図や闇の深さは計り知れない。スマートフォンやインターネット、SNSの利用について、生徒自らが問題点を洗い出し、よりよい活用方法を考えられる指導を望む。また、こうしたSNSの利用に関しては家庭教育の中で指導されるべきこととも考える。保護者への教育の場があってもよい。
			「いじめ未然防止、早期発見・早期対応」と「不登校生徒の減少」の取組 ・ふれあい月間とQ-Uアンケートの活用 ・スクールバディ（SB）の活用 ・教育支援委員会の活性化	・保護者学校評価（12月）「いじめ未然防止取組・不登校対策」肯定的評価80%以上 ・Q-U調査結果分析と要支援生徒の具体的な支援 ・スクールバディ（SB）活動の充実 ・教員学校評価「教育支援委員会」肯定的評価80%以上	C	B	・1年生のスクールバディ研修、市内の交流会行い、朝礼にてスクールバディの活動報告を行った。 ・2学期の保護者学校評価「10 いじめ防止の態度」の肯定評価は51.2%であった。2学期の教員学校評価「19 生徒が正しい生き方を探求し、実践できるような集団となるように工夫している」の肯定的評価は96.2%であった。 ・保護者に対していじめ防止に向けた取組を、具体的に周知する必要がある。	・Q-U調査の結果を講師を招へいし具体的な御助言をいただいたので、改善策に取り組む。 ・スクールバディ（SB）の具体的な活動内容を日頃から周知し、全校生徒の理解を深める。 ・教育支援委員会は月3回実施し、スマイリースタッフやスクールカウンセラー、スクール・ソーシャル・ワーカーからの情報も取り入れ、必要な支援を検討している。引き続き、不登校対策や特別支援について共通理解を図る。	いじめ未然防止のためにスクールバディは、一定の効果があると判断する。当該生徒以外の生徒の意識付けも重要であり、「仲間」という思いを深めるために学校行事等を通じて、信頼し合う関係性が構築できる活動に取り組むことを期待する。生徒同士だけでなく、教員と生徒の関係性が良好である場面も感じられた。この関係性を活かして、いじめの防止や発見に役立ててほしい。
			「心の教育」の充実 ・「特別の教科 道徳」授業の充実 ・人権教育の充実 ・生命尊重教育の充実	・内容項目に応じた道徳科授業の指導と評価の一体化と授業改善 ・人権教育プログラムに基づいた生命尊重の指導工夫改善 ・「SOSの出し方」講演会の実施と啓発	B	B	・9月に道徳授業地区公開講座を「よりよく生きる」をテーマに、ベットの殺処分現状から命の尊さを共に考え学ぶ内容の講演会、「SOSの出し方」講演会、がん教育講演会を1学期に実施し、意識啓発に努めた。事後における生徒の感想文からは、命の尊さについて深く考える様子がうかがえた。 ・2学期の保護者学校評価「8 生徒理解を深め、生徒と教員の信頼関係を築くよう努力している」の肯定評価は72.9%であった。	・道徳授業地区公開講座や、様々な講演会で学んだいのちの大切さ等を、今後の教育活動の中でも教師が意図的に振り返り、今後の生活に生かしていく指導を継続する。 ・道徳科の評価については、指導の内容項目において生徒にどのような力が身に付いたかを具体的に記述し、指導と評価の一体化を図る。 ・今後も引き続き教員は日頃から受容的な態度で、生徒が相談しやすい環境をつくる。	道徳授業地区公開講座のテーマは、現実には起きている事を選んでおり、より身近な自分事として捉えられて効果が高いと感じる。道徳の授業の中で、生徒と保護者が互いの立場から意見を伝え、聞くことができる機会があってもよいと考える。
一 思 い や り を も ち 協 力 す る 生 徒	「 人 間 力 向 上 」 を め ざ す の 育 成	生徒主体の特別活動の充実を図り、互いを認め合う生徒を育成する。 ・共に生きる「共生」	「学級経営」「学年経営」の充実 「特別支援教育の理解と交流」 ・不登校、いじめ防止対策の推進 ・Q-U調査結果の活用 ・国立市におけるフルインクルーシブ教育の推進	・不登校、いじめ防止対策に関する目標の明言化、別室を利用した居場所づくり ・特別支援学級（A組）の円滑な運営と交流及び共同学習の実施 ・Q-U結果分析による要支援生徒の支援と生徒の学級に関するアンケートで肯定的評価80%以上 ・インクルーシブ教育の生徒保護者への啓発	B	B	・ほっとスペースを利用することで、学校に登校できている生徒がいる。 ・「交流及び共同学習」を研究テーマに、特別支援学級A組と在籍学級の研究授業を、外部講師を招聘し2回実施した。生徒の意見聞き、授業の参加方法等を教師が柔軟に考える意識の変化があった。 ・保護者会等で特別支援教育について説明し理解を求めた。生徒への啓発は朝礼での講話、学校だよりを中心に取り組んでいる。 ・Q-U結果の学校生活肯定的評価が、全学年平均が77%であった。全国平均は72%のため、全国平均を上回っているが、学級内における友人関係や教師との関係性について今後も改善を図っていく必要がある。	・「交流及び共同学習」の実践において、活動の前に生徒の意見を聞き、生徒が主体的に行事や授業の参加方法について考える大切さが分かった。今後も引き続き、生徒の意見を取り入れながら、教師も共に考え、様々な活動に「交流及び共同学習」の視野で柔軟性のある企画・運営をしていく。 ・保護者に向けて、保護者会や学校だより等を通じて、インクルーシブ教育の理解啓発を継続して行う。	保護者や在籍学級の生徒が「特別支援学級がなぜ存在し、どんな支援が必要なのか」を認識し、理解できる場の設定が必要であると考え。インクルーシブ教育の内容が分かりにくく、具体的な説明と誰もが同じ言葉で理解できるようになることが期待される。
			「生徒が主体となって活動する生徒会活動の充実」 ・生徒主体の学校行事の実施 ・生徒会、委員会活動の活性化 ・部活動等を通した自主的・自律的運営力の育成	・学校行事における生徒の充実度において肯定評価90%以上 ・生徒会、ボランティア活動の充実 ・生徒会によるいじめ撲滅推進活動とスクールバディ（SB）との連携 ・部長会等を通した生徒の主体性の促進	B	A	・行事後の生徒の事後アンケートで、運動会の充実度84.2%、合唱コンクールの充実度は肯定評価90%、保護者アンケート「13. 運動会・宿泊行事等の学校行事へ積極的に参加している」の肯定評価は94.7%である。その目的をほぼ達成できたとみることができる。 ・生徒会活動等の活動は、2年生が中心となり教育長や教員委員の方々と意見交換するなど、生徒によるよりよい学校づくりに励んでいる。	・生徒の意見を取り入れ学校行事を企画・運営した。生徒主体による学校行事等は今後も実施していく。 ・夏季休業期間中の地域活動の参加者は延べ77人、秋の地域活動の参加は延べ46人であった。今後も引き続き、地域連携を充実させ生徒が地域貢献に携わる機会を設ける。 ・生徒会活動におけるボランティア活動やいじめ撲滅推進活動を引き続き取り組む。	ボランティア活動を通じて、地域社会とのつながりをもつことができている。地域に住む人々、先輩方を講師として様々な職種、生き方を知る場面があってもよいと考える。職場体験の際に、職場の玄関でかばんを下ろし、礼儀正しく挨拶をしている2年生の姿があり、社会の一員としての学びを得ていると感じた。
			「総合的な学習の時間」の充実 ・キャリア教育の充実 ・多様性に関する教育の充実 ・宿泊行事や校外学習の充実 ・共生社会実現に向けた啓発・充実	・職場体験の実施に向けたキャリア教育の充実 ・市の外部人材を活用した多様性に関する指導の充実 ・「がん教育」講演会の実施と啓発	B	B	・3年生は、3学期に車いすバスケットボールの体験授業を計画している。 ・2年生は、職場体験活動を10月16日より3日間実施した。また、1学期に外部講師を招聘し、がん教育を実施した。事後の生徒の感想からは、勤労の大切さと意義について深い学びになったことがうかがえる。 ・1年生は、10月にTGGの校外学習、1月に自然体験活動（スキー教室）を実施した。実行委員を中心として、持ち物やルール等を決め実行した。事後の生徒の感想から達成感を味わうことができたと考えられる。	・「総合的な学習の時間」の効果的な計画・実行を図るために、カリキュラム・マネジメントの観点から道徳科、特別活動などを教科横断的に組み合わせ、生徒の發揮される資質・能力を教師が明確に意図し指導する。また、今後も引き続き、生徒の主体的な学びを実現させるため、実行委員による計画やルール決め等を奨励し実施する。	教員と共に考え、体験をして、社会や他者との関係の中で、感動を共有できる場が今後も多く設定されることに期待する。

達成状況の指標 A:100%～80% B:79%～50% C:49%以下